

2. 取組を進めるに当たり困難であった事例について

A. コースワークの充実・強化

③国内外の大学との単位互換協定やダブル・ディグリー等による教育課程の充実

●早稲田大学文学研究科人文科学専攻アジア地域文化学コース

「アジア研究と地域文化学」の事例

(具体的に何を実施し、何が困難であったのか)

当初の計画では、①本学が平成19年度に導入する“早稲田大学アジア特別奨学金”を活用し、中国の北京大学・復旦大学、韓国のソウル大学・高麗大学・延世大学等からの学生を受け入れ、三年在学中に博士論文を完成させる。②本学が推進している“ダブルディグリープログラム”に従って、これを台湾大学、韓国の高麗大学校文科大学・成均館大学東アジア学院等と連携して実施する。③中国政府が2007～2011年度に実施予定の“国家建設高レベル大学公派研究生項目”による留学生を受け入れる、の三つのプログラムを目指したが、実現できたのは③だけであった。

(苦勞したこと、困難であったことの具体的な要因は何だったのか、それにより実施内容がどのような影響を受けていたのか)

実施を困難にさせた最大の原因は、これを実施する我々の準備体制が不十分だったことにある。すなわち「特論ゼミ」の実施や「レビューカード」の開発などに追われて、留学生の受入準備に余裕がなかった。また21世紀COEプログラムでは、期間中に日本人・外国人を含む若手研究者のかなりの者に学位を授与することができたが、それに至るまでの指導に五年を要している。これに対してGPは実質二年の期間であり、ほとんど対応する間もないままプログラムの期間が終わってしまったのが実情である。計画が甘かったと反省している。ただしそれがプログラム全体に大きな影響を与えているわけではない。

(どのように対応し、どのような結果が得られたのか、また、その結果が望ましいものではなかった場合、あらかじめどのように対応していれば適切であったのか、どうすればより良い結果を導くことができたのか)

実施する上での受入準備が不十分だったため、ほとんど何も対応できなかった。実現できたのは③「国家建設高レベル大学公派研究生項目」だけである。これは中国武漢大学からの留学生で、受入教員を中心として日本語教育・専門研究指導を行い、帰国後に博士論文を完成することができるように指導した。この経験を鑑みると、日本から送り出す院生も、外国から受け入れる院生も、一年の滞在期間に博士論文を完成できる段階に達している院生を限定して選択実施するように計画すれば、あるいは①や②のプログラムも実行できたかもしれない。

2. 取組を進めるに当たり困難であった事例について

A. コースワークの充実・強化

④社会人、留学生、他分野・他大学からの多様な大学院生に対応した基礎学力補完教育の実施やカリキュラムの提供

《人社系》

●早稲田大学文学研究科人文科学専攻アジア地域文化学コース 「アジア研究と地域文化学」の事例

(具体的に何を実施し、何が困難であったのか)

当初、本プログラムでは博士後期課程のみの「アジア地域文化学コース」の下に「修士課程」を新設し、学部卒の学生以外に、一般の社会人、キャリアアップのための社会人、外国人学生などを受け入れ、2009年度の学生募集を目指して計画を立てた。これは必ずしもそのまま博士課程には直結しない「独立修士課程」として構想されたもので、専門研究を極めるよりもむしろアジア地域文化に関する広い教養を修得させることを目指したものである。これも本プログラムの期間中には実現できなかった。準備期間の不足が原因である。

(苦労したこと、困難であったことの具体的な要因は何だったのか、それにより実施内容がどのような影響を受けていたのか)

本プログラムが採択された後、教養修得を目的とする「独立修士課程」の新設を目指したが、本プログラム期間中に実現できるかどうか、という時間的な問題に直面した。採択後にすぐカリキュラムを初めとする新設の準備を行い、翌年度の早い段階で入試要項に三年後の募集を掲載することは、他の複数の実施プログラムが同時に走っているため、容易なことではなかった。

(どのように対応し、どのような結果が得られたのか、また、その結果が望ましいものではなかった場合、あらかじめどのように対応していれば適切であったのか、どうすればより良い結果を導くことができたのか)

実現されなかった「独立修士課程」の理念を継承させ、それに代わるものとして、本学オープン教育センターの中の、とくに大学院生を対象とする「研究テーマカレッジ」に、「アジア学の名著を読む」という講座を開設して、3分野6科目を設置した。ここでいう「名著」とは、広く長く読み継がれてきたアジア学の入門書を指し、さまざまな研究分野の人たちが共通に読みあえ、かつ個別の研究分野にフィードバックできる古典のことである。これによって学内の研究科をこえてアジア学の基礎と教養を共有できる体制ができた。現在はまだ科目数が少ないが、今後さらに増やして行く予定である。